

（妊娠・出産と結婚との関係）

わが国では、婚外子（非嫡出子）の割合は極めて小さいものの、最近では、妊娠してから結婚をするという形態（俗に「できちゃった婚」と呼ばれている）により子どもが生まれるというケースが増加している。

厚生労働省「人口動態特殊報告 出生に関する統計」（2001（平成13）年）によれば、結婚期間が妊娠期間より短い出生数は増加傾向にあり、2000（平成12）年では、嫡出第1子出生数の約4分の1を占めている。これは20年前と比較をすると、約2倍の増加となっている。母の年齢階級別にみると、10代後半では8割、20代前半では6割、20代後半では2割となっており、年齢層が若くなるほど多くなっている。

同様の状況についてみると、毎日新聞社の「第1回人口・家族・世代世論調査」（2004（平成16）年）¹によると、15%の女性が「同棲をしている。または過去に同棲の経験がある」と答えている。30代前半では21%に上っている。こうした状況からみると、わが国でも結婚前に、あるいは同棲中に妊娠するという事態が少なくないものと想像できるが、出産となると、いわゆる「できちゃった婚」のように法律上の結婚という行為と密接に結びついている。

なお、10代後半など若い世代の「できちゃった婚」の中には、親としての準備などが整っていないため、若い夫婦のそれぞれの親やきょうだい、地域、行政における支援が必要な場合が多いものと考えられる。

2 夫婦の出生力の低下

第1章第3節でみたとおり、1990年代以降、夫婦の出生力が低下してきている状況がみられる。妻の生まれ年別にみると、1960年代以降に

生まれてきた世代から低下傾向にある。

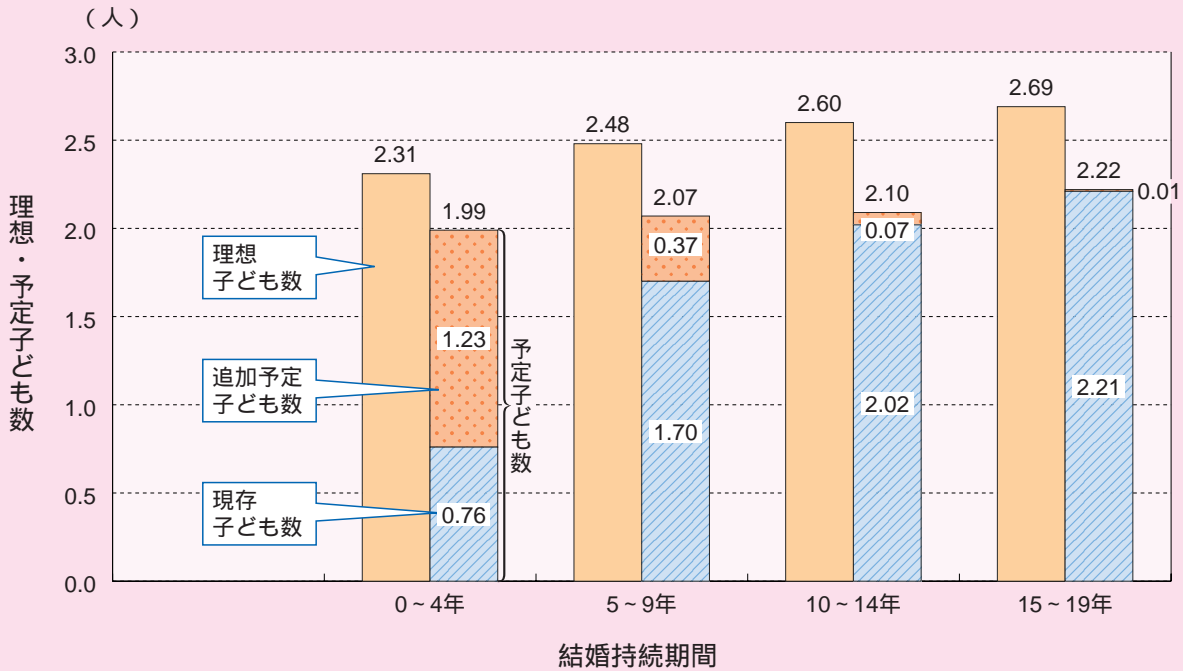
国立社会保障・人口問題研究所「第12回出生動向基本調査」（2002（平成14）年）によれば、夫婦に対して、理想的な子どもの数（理想子ども数）と、実際に持つつもりの子どもの数（予定子ども数）を尋ねたところ、結婚期間が短い夫婦ほど、理想、予定子ども数とも少なくなっている。全体の平均では、理想子ども数は2.56人、予定子ども数は2.13人であるが、結婚持続期間が5～9年の夫婦では、理想子ども数2.48人、予定子ども数2.07人、同じく0～4年の夫婦では、理想子ども数2.31人、予定子ども数1.99人となっている。結婚持続期間が0～4年という結婚後5年未満の夫婦の場合、以前の調査では現在よりも高い数値を示していた。たとえば、1987（昭和62）年調査では、理想子ども数2.51人、予定子ども数2.28人であった。90年代以降、理想、予定子ども数ともに比較的急に低下しつつある。

このように最近における結婚持続期間が短い夫婦では出生力の低下傾向がうかがえるが、その原因は後述する様々な要因に加えて、バブル経済崩壊の心理的影響が夫婦の出生力の低下に影響を与えているのではないかと、晩婚化による出生力の低下が夫婦の出生力の低下にも影響を与えているのではないかと、自分の子どもに自分以上の高学歴を求める傾向があり教育費等の負担を考慮して、出生抑制を行うなどの影響を与えているのではないかと、都市部において継続就業する女性の存在、一方では仕事と子育てを両立できる環境の不十分なことなどが、夫婦の出生力に影響を与えているのではないかなどの指摘がなされている。²

1 全国の20歳から49歳までの女性4,000人を対象に、調査票を預けて記入してもらう「留め置き法」で実施した世論調査。有効回答率は61%

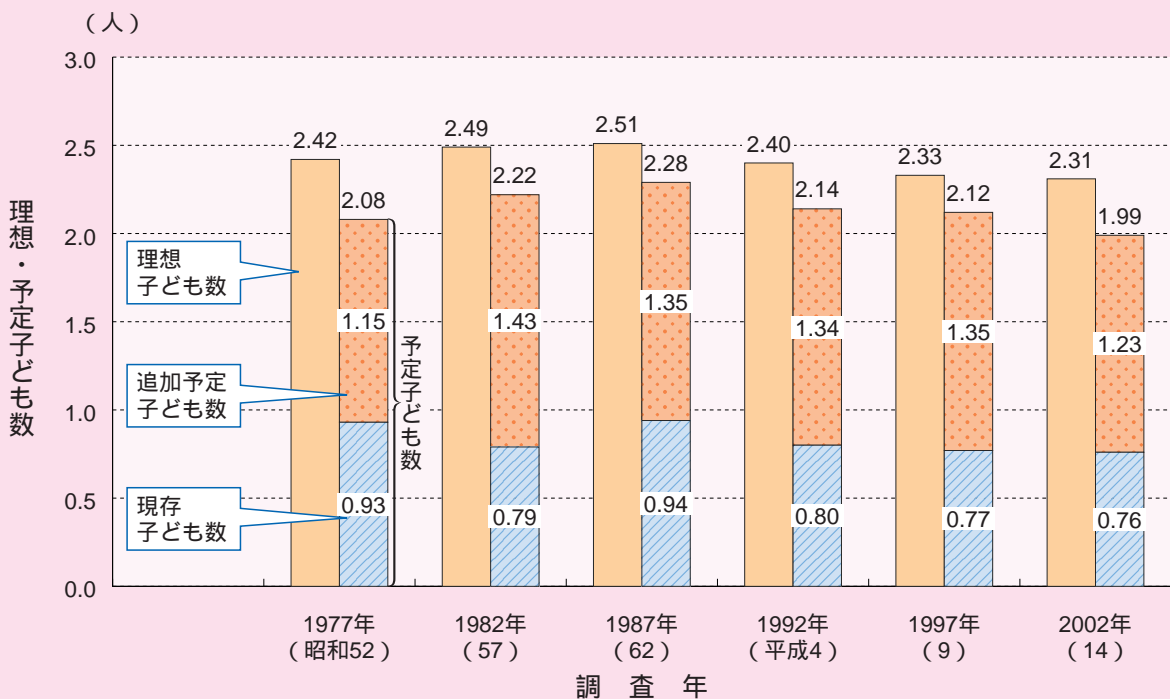
2 「夫婦の出生力の低下」を議論した社会保障審議会人口部会委員の意見を参考にしている。

第1-2-9図 結婚持続期間別にみた、平均理想子ども数と平均予定子ども数



資料：国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」(2002(平成14)年)
注：初婚どうしの夫婦(理想子ども数不詳を除く)について

第1-2-10図 調査年別にみた、平均理想子ども数と平均予定子ども数(結婚持続期間0～4年)



資料：国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」
注：初婚どうしの夫婦(理想子ども数不詳を除く)について